

ジェイムズ・ミルにおける中間階級と議会改革

—余暇と陶冶—

立 川 潔

目 次

- I 問題の所在
- II ジェイムズ・ミルの中間階級
 - II-1 文明の進展と中間階級
 - II-2 富と名誉
 - II-3 貴族的統治構造による知的道徳的腐敗
- III 議会改革の目的と展望
 - III-1 議会改革の目的
 - III-2 議会改革の展望
- IV むすびにかえて

I 問題の所在

これまで、ジェイムズ・ミルと彼を指導者とする哲学的急進派の思想は、産業資本の全面展開を成し遂げようとする思想といった性格規定が一般的になされてきたように思われる。なるほど、ミルは地主貴族の政治支配との対決を通じて、彼等の階級的利益を擁護する法や政策を「不自然な不平等」と批判し、その撤廃と「蓄積の自然法則」の貫徹を自らの目標としていた (Mill [20] p.285)。さらにまた文明の進展が自由の擁護者としての中間階級 (middling rank; middle rank; middle class) の増大を伴うというミラーを通じてヒュームまで遡ることができるスコットランド啓蒙の歴史認識を共有していたし (Fontana [2] p.122)、多くの著作で中間階級を賛美し彼等の指導に労働階級が従うという確信を表明してもいる。

しかし、そのことから直ちにミルのいう中間階級が産業資本金層を意味

すると理解したり、彼の思想が労働者を同盟に引き込むことで産業資本の論理を貫徹させようとする議会改革運動に思想的根拠を与えようとしたものと考えすることは、必ずしも正しいとはいえないであろう。たとえジェイムズ・ミル達哲学的急進派の運動が、今日からすれば、資本の論理に適合的な社会形成に一定の役割を果たしたという評価が可能だとしても、そのことは、必ずしも彼等の関心と目的がそこにあったことを意味しないのである。

一例として、「統治論」の最終章における周知の中間階級賛美論を取り上げてみよう。ミルは、そこで「民衆のうち中間階級の下にいる部分の意見を形成し、彼等の精神を指導する」のは中間階級であるという命題を「一般的な法則」であると主張し、その反証とされるナポレオン戦後不況下でのモブの無秩序な行動は、むしろその命題の正しさを証明するものだとして次のように述べている。

「少年と婦人で半分以上構成され、2, 3時間あるいは2, 3日、ある特定の町を混乱に陥れる暴徒の無秩序は何を意味するのか。人口がほとんどすべて富裕な製造業者と貧しい労働者から構成されているために中間階級が極端に少ないとりわけて不幸な工業地域 (a manufacturing district, peculiarly unhappy from a very great deficiency of a middle rank, as there the population almost wholly consists of rich manufacturers and poor workmen) において、時折起る騒動は何を意味しているのだろうか。労働者達の精神に対して誰も努力を払おうとせず、彼等の難儀に共感してくれる中間階級の徳のある家族はおらず、彼等の子供達が見て誉め称えることのできるような家族の手本は存在しないのである。しかも彼等は、年々極めて高い賃金と極めて低い賃金との間でたえず変動するという極度に不利な状態におかれているのである。」(Mill [13] p. 32, 訳182頁)

明らかに、ミルは中間階級の中に「工業地域」における「富裕な製造業者」を含めてはいないのである。それどころか産業革命の結果「少年と婦人」が労働市場に投げ出されるとともに、労働者が景気変動に伴う賃金の急激な変動に曝されている工業地域の状態は、ミルにとっては忌み嫌うべき状態と考えられていたのである。

そうであれば、我々は、性急にミルの思想を産業資本の利益の代弁と断定してはならないであろう。よりいっそう詳細にミルの思想を検討し、その特徴を解明する必要があるように思われる。本稿では、以上の問題意識から、彼の描く中間階級とはどのような性格をもつ階級であったのか、さらに議会改革に託した目的は一体何であったのかを改めて問い直してみたい。そうすることで、ミルの主要な問題関心が、当時の貴族的統治構造のもとでの知的道徳的腐敗に向けられていたことを明らかにしようと思う。

Ⅱ ジェイムズ・ミルの中間階級

Ⅱ-1 文明の進展と中間階級

すでに触れたように、ジェイムズ・ミルも、文明の進歩に伴う中間階級の拡大というスコットランド啓蒙の歴史認識を継承していた。「文明の被造物」(Mill [5] p.417) としての中間階級は、ミルにとって、「生存と品位の維持手段にかんして不安のない、しかも大きな富をもつことから生じる悪行と愚行とをしないでかすおそれもない」中庸な財産所有者 (the men of middling fortunes) であり、「自らの時間を自由にすることができ、肉体労働の必要性から解放され、いかなる人の権威にも隷属せず、最も楽しい職業に従事している」人々である。とりわけ注目に値するのは、彼等を「一つの階級として、人間的享受の最大量を獲得している人々」と規定していることである (Mill [14] pp. 64-65, 訳56-57頁)。ミルが「人間的享受」という場合、それは他の動物と共有する生理的欲望の充足を意味するのではなく、むしろその欲望を抑制して知性や徳性を陶冶することによってえられる快

樂の享受を意味しているのである。

「嗜好の快樂，知性の行使の快樂，徳性の快樂はしかるべく陶冶されるならば，欲望の誘惑 (the solicitations of appetite) を抑制する力を獲得するのであり，全ての感覚が直接に与えることができるよりも幸福のより価値ある要素として重んじられるのである。」(Mill [17] II p. 366)

この一文だけからも，ジェイムズ・ミルがけっして快樂の質的区別を問題としないような功利主義者ではなかったことが容易に理解されよう¹⁾。「教育論」や『人間精神現象分析』から明らかなように，彼は古典古代の徳性を重んじた功利主義者であった。知性 (intelligence)，節制 (temperance)，正義 (justice)，寛大 (generosity) という「古代文明人 (the ancient) の四つの基本的な徳性は，人間精神がそれらを所有するように賦られることが望ましいすべての資質を完全に含んでいる」(Mill [11] p. 16, 訳45頁) と彼は考えていたのである (Mill [17] II p. 280)²⁾。

彼は，文明の進歩とともに，徒らに富を追求するのではなく，余暇を知

-
- 1) したがって，ジョン・ステュアート・ミルの功利主義の特徴とされる高級な快樂と低級な快樂との質的区別は，通常考えられているようにロマン主義の影響に起因するというよりも，むしろジェイムズ・ミルの思想の継承ないし精緻化というべきなのである。この点で我々はトマス (Thomas [31] pp. 42-43, 51-52頁) を支持したい。なお，トマスは，ジェイムズの初期のピューリタニズムが「快樂の追求を徳の追求に同化させる」彼の傾向を生み出したとしている (Thomas [30] p. 100)。
 - 2) この点は，ジョンの『自伝』における早教育の内容を一瞥すれば明らかであろう。また，次のジョンの証言も参照されたい。「私の父親が説いて聞かせた道徳的な教えはいかなる場合にも主として Socratici viri (ソクラテス学徒) のそれであった。すなわち，正義，(極めて広い範囲に適用した) 節制，誠実さ，忍耐，苦痛ととりわけ苦勞 (labour) に進んで立ち向かうこと，公共善への顧慮，人はその真価によりモノはその固有の有用性に従って評価すること，放縦な怠惰の生とは反対の意味での努力の生であった」(Mill, S. [24] p. 49, 訳49頁)。

なお，labour は訳書では労働と訳されているが，生産活動に限定されるものではなく，困難な状況の下で努力するという広い意味で用いられている点に留意したい。この点，貴族批判との関連で注5)を参照。

性と徳性の陶冶に捧げる人々が増大し、そしてより一層多くの人々が人間の享受を獲得することを期待したのである。したがって、彼が期待した中間階級とは、商人や製造業者という生産活動にかかわる特定の階級を指すのではなく、過度と過小の財産から生じる弊害を免れながら、しかもその余暇を知的道徳的な資質の陶冶に振り向ける人々なのである³⁾。

「我々の本性の偉大にして顕著な属性、すなわちその進歩性、知識の一段階、つまり幸福の手段に対する支配の一段階から他の段階への不断の前進力から発するあらゆる恩恵は、大いに、自分の時間を自由にしうる階級の人々、すなわち、一定程度の享樂が可能な生活手段を享受することにかんしてあらゆる不安から解放されるに十分なほど富んでいる人々の存在に依存しているように思われる。知識が啓発され広められるのは、この階級の人々によってである。それを普及するのにもまたこの階級によってである。そしてまた、その子供達に最良の教育を受けさせ、立法者、裁判官、行政官、教師、あらゆるアートの発明者、及び自然の諸力に対する人類の支配を拡張する全ての重要な事業の指揮監督者のような、高級で細心の注意を要する (higher and more delicate) 社会的職務全体のための準備をさせているのはこの階級の人々なのである。」(Mill [14] p. 63, 訳55頁)

一見して明らかのように、ミルは実物的な生産活動を促進するという視点から中間階級に高い評価を与えているのではない。なるほどミルは、「あらゆるアートの発明者、および自然の諸力に対する人間の支配を拡張

3) 政治経済学への専心と議員としての公的活動を要請する1815年8月23日付のリカード宛書簡は、まさにリカードにこのような中間階級になることを勧告するものであった。「私の大いに望みたいことは、いまやあなたはご家族全部の幸福をはかるに足るだけのたくさんのお金をつくられたのだから、結局腹八分にまざるものはないというところでこの種の獲物には満足し、これからは他の仕事のために余暇を使うということでありたいものです」(Mill [6] pp. 251-52, 295-96頁)。

するすべての重要な事業の指揮監督者」という生産活動と直接関連しうる職業をも中間階級が送り出すべき職務として挙げているが、むしろその主張の中心は商工業と直接結びつかない社会の知的道徳的な指導的職務への従事を期待された階級ということにあったことは明らかであろう⁴⁾。この点は、彼の進歩概念と深く関連しているように思われる。引用から明らかのように、ミルにとって、進歩は物質的富裕の増大によってではなく知性によって、しかも生活手段を獲得するための活動から解放された自由な時間において獲得される知性によって計られる概念である。したがって、その進歩の中心的な主体は、富を直接増大させる商工業者という性格にはではなく、余暇を享受しうる、しかも大財産によって「苦勞 (labour) しようという最も強い動機を欠落」させていない中庸な財産所有者に求められたのである。スコットランド啓蒙の中心に位置したヒュームやスミスが近代の文明社会の生産力を支える商工業者を中間階級の核と捉えたのに対して、この位相のズレはどのように理解されるべきであろうか。節を改めてこの点を検討しよう。

II-2 富と名誉

ところで、ミルが考えるような、中庸な財産の所有で満足し余暇を知的道徳的な徳性の陶冶に捧げる中間階級は、文明の進展とともに必然的に生じるものなのであろうか。いったい富の追求というものは、中庸な財産の所有で終止符を打ちうるものであろうか。むしろ他者への共感を喪失したなりふりかまわぬ利己的な富の追求に陥る危険が絶えずつきまとうので

4) 中間階級は「科学、アート、そして立法そのものにたいして、光彩をはなつ最も際だった人物を、人間性を高め洗練してきたあらゆるものすべての主たる源泉を供給している」(Mill [13] p.32, 訳181頁) 階級、あるいは「知識を深め、かつ人類にとって有用な諸発見をなしうる、終身労働の必要から解放された階級……医者 (physicians) や立法者……」(Mill [9] p.11) との記述は、いずれもミルにとって中間階級が、商工業者よりもむしろプロフェッショナルな職業に従事している人々を中心にイメージされていたことを示している。

はないだろうか。実際、ミル自身このような利己的な追求が現実において一般的であることを知り抜いていたのである。

「大抵の人々の生がなんと完全に富と野心の追求に奪われてしまっていることか。家族愛、友人愛、祖国愛、人類愛が、富や権力への愛と対立した場合、なんと多くの人々においてそれらが無力になることか。」(Mill [17] II, p. 215)

仁愛や他の徳性の快樂が顧みられず利己的な快樂が追求されている現実を直視していたジェイムズ・ミルにとって、ジョン・ミルが『自伝』で証言しているように、「少なくとも現在の社会状態においては支払わなければならない代償に値する快樂はほとんど存在していない」(Mill, S. [23] p. 49, 訳50頁)と考えられたのである。なるほどジェイムズ・ミルは、「人間をありのままの姿で、すなわち欲望をもち、苦痛を避け快樂を獲得しようとする欲求によって支配されている存在」(Mill [10] p. 712)と捉えたが、現実の快樂をそのまま肯定する類の功利主義者ではなかったのである。彼にとって主要な課題は、このような快苦原理に従う人間が現実の利己的な快樂の追求から脱して、いかにして「嗜好の快樂、知性の行使の快樂、徳性の快樂」を陶冶することが可能であるか、という問題を解決することであった。文明の進展は富者に隷従することのない独立した多数の中間階級を生み出したのだが、しかし現実には彼等の生が知性と徳性の陶冶に向かわないのは何故かという問題提起とその解決こそミルの思想的実践的営為を基本的に規定しているものなのである。

それでは何故なりふり構わない利己的な富の追求が生じるとミルは考えるのであろうか。

「これほどまでに高い熱意を人類に掻き立てさせる富と権力の追求とは

いったい何であるか。それは、富が購うことができ、権力が支配することができるたんなる飲食その他の物質的な対象に対する愛ではまったくない。それらのものには、人は結局のところ急速に飽きてしまう。そうではなくて、その理由は、これらの強味によって容易に社会から好意的に見られるからである。これこそが、富に対する欲求を無限にし、人間の精神に影響を与える上で富がもっているあの抗し難い影響力を与えているのである。」(Mill [11] p. 44, 訳108-09頁)

ミルも、アダム・スミスと同様に、我々が富に対して強烈な関心を抱くのは、けっして富の「固有の有用性」からではなく、人間本性における最も顕著な「人々から好意的に見られたいと我々が感じる熱烈な欲求」に起因していると思倣した。そして、ミルによれば、富とそれによってえられる人々の好意的な評判や尊敬のもたらす快楽との間に強力な観念の連想が形成されることによって、目的と手段の転倒が生じ、貨幣獲得が自己目的化することになるのである (Mill [17] II p. 215, p. 266)。

周知のように、スミスにおいては、このような富者の境遇への憧憬が、人々の勤労意欲を刺激し節儉を促し、その結果として富裕の一般化を達成させるとともに社会秩序の安定化をもたらす動因と認識されていた。たとえば、スミスによれば、虚栄 (vanity)こそ「我々が自分の暮し向きの改善と呼ぶ人間の生の大目的」によって我々がもくろむものであった (Smith [27] p. 50, 訳73頁)。しかも「自分の暮し向きを改善しようとする欲求」は「一般に穏やかで冷静な (calm and dispassionate) ものであるが、母親の胎内から生まれ出て墓場に入るまで、我々から離れることのない欲求」(Smith [28] I, p. 341, 訳(1)534頁)でもあった。富者の境遇への憧憬によって喚起される貯蓄欲は、人間の本性として普遍的な原理であるとともに、「瞬間的であって偶発的なものにすぎない」欲求ではなく、「全ての人がもっている一様で、恒常的で、絶え間ない」欲求であるがゆえに、「政府の濫費

と行政上の最大の過誤」にもかかわらず、富裕化と進歩とを達成させうる原理 (Smith [28] I, p. 343, 訳(1)536頁) として是認されたのである。しかもその欲求は穏やかであるがゆえに、なりふり構わぬ利己主義に陥ることのない欲求であった。ハーシュマンが鋭く指摘したように、このような欲求は、荒々しいが瞬時的である有害な情念に勝利し、「人間本性の最も破壊的で有害な側面を抑制し、おそらく減少させるかもしれない」と期待されたのである (Hirschman [3] pp.65-66, 訳65-66頁)。その上、まさにこの経済活動を通して、勤勉、節儉、正直、期限厳守など近代社会に適合的な徳性が陶冶される。したがって、獲得欲の主体たる商工業者が近代の文明社会の推進者としての中間階級の核と認識されたのである。法の支配の下での自由が保障されれば商工業が発展し、それがまた自由を鞏固なものにすることを示したスミスにとって、主要な政治問題は、政体の選択や政治的権利の範囲ではなく、そのような原理の働きを保障する法の支配の確立であった。

それに対して、ミルは、富の追求が穏やかなものにとどまらず利己的なものに陥っている現実の原因をまさにこの富と他者の好意的な評価との強力な観念の連想に求めたのである。スミスは他者の好意的な評価をうるための、したがって自分の暮しをよくするための貯蓄欲は穏やかなものと認識したが、ミルはまさにそのような富によって社会的名声が得られる状態こそが、獲得欲を過剰にしていると判断したのである。ミルは、富者の境遇への憧憬を人間本性からの必然的な結果とは考えなかった。換言すれば、この名誉を目的とした富の追求は快苦原理から直ちに導き出されるものではなかった。というのは、ミルにとって富と名誉との観念の連想は分解しえない必然的なものではないと考えられたからである。結論を先取りすれば、この観念の連想は、富を唯一の権力の源泉にしているイギリスの現実の貴族的統治構造によって強力なものにさせられていると認識したのである。それゆえ、獲得欲が穏やかになるためには、そして知性と徳性が

陶冶されるためには、なによりもこの誤った観念の連想を断ち切る必要があると考えられたのである。こうしてミルにおいてはこの連想を解きほどき難くしているイギリスの現実の貴族的統治構造の変革が最重要な課題として位置づけられることとなったのである。

このように、ミルの関心は、人々の主要な欲求の対象が富から知性と徳性に向かうことにあった。それゆえ、ミルにおいては、生産活動と結びついた徳性ももちろん高く評価されてはいるが、しかし中間階級に期待した最高の知的道徳的徳性は生産活動から離れた余暇においてのみ陶冶しうる徳性であったのである。たとえば祖国愛や人類愛を取り上げてみよう。ミルによれば、普通の人々 (the common run of men) においては、「我々の感覚の対象」になりうる具体的な個人、自らの家族、階級の快苦と自らの快苦との間の連想に基づく「狭い共感」は抱くことができるが、しかし、自国の大部分の人々、ましてや人類一般という漠然とした観念との強力な連想は抱きえない。祖国愛や人類愛をもちうるためには、「一般的名辞と包括的な命題を使用しうるように早くから訓練され、人間の意識のあらゆる状態の中で人々を最も高貴にする状態が依存している連想を形成する」ことを可能にする「哲学的教育 (Philosophical Education)」(Mill [17] II, p.278) が不可欠とされる。このような教育こそ「最高の知性を修得するための富と時間をもつ階級の教育」(Mill [11] p. 42, 訳103頁) と考えられたのである。

なるほど、ミルは、「統治論」の中で「知的諸能力は、苦勞 (labour) の所産である。しかし、世襲貴族は、苦勞しようという最も強い動機を欠落させている。したがって、彼等の大部分は、精神的能力に欠けている」(Mill [13] p.7, 訳125頁) と述べている。しかし、このことは、ミルが生産階級の立場から貴族批判を展開していることを示すものではない。注2)で指摘したように、labour は、必ずしも生産活動における労働を意味するものではなく、したがって生産活動に従事しなければ知的能力を獲得しえないと考えられていたのではないのである。ここでのミルの趣意は、文明の進展とと

もに貴族が「財産の安全な所有とそれがもたらす耽溺の安全」を享受することによって困難な状況の下で努力する動機を喪失してしまっているということにあったのである⁵⁾。事実、次節で取り上げるように、ミルは封建時代などの厳しい環境が世襲貴族といえども知的能力を陶冶せざるをえない状態においていたと認識しているのである。したがって、なによりも経済活動の中でこそ高度な知性と徳性が形成されるという認識はミルの思想の中に見出しがたいように思われる⁶⁾。

- 5) したがって、世襲貴族は「精神的能力に欠けている」という「統治論」での主張は、けっして時空を超えて成立する普遍的な命題として提出されているのではなく、当時のイギリスの歴史的状态を踏まえて提出されている命題といえる。このことは「統治論」の性格が、一般に考えられているように歴史的諸文脈を全く捨象した抽象的な理論ではないことを示しているように思われる。『英領インド史』が「市民社会一般の研究への悪くない入門」であり、「その主題は、これまで我々が知っている最も粗野な状態から最も完成された状態に至るまでのほとんどすべての比較的注目に値する状態における社会秩序の諸原理と諸法則とを暴露する」ことにあったとすれば、「統治論」は、一見抽象的な形式をとりながら、まさに「これまで我々が知っている……最も完成された状態」——それは現実の貴族の支配するイギリス社会なのだが——という特殊歴史的な状態を前提に、その状況の下で快苦原理に従う人間がどのような行動をとるかを示すとともに、「人間の事象」の経路を「この最善の経路に最も接近させることができる手段」(Mill [7] pp. 195-96, 訳231-32頁)——それは代議制なのだが——を探求する目的で書かれたものなのである。それゆえ、「統治論」は『英領インド史』を書いた歴史家ミルの著作なのである。なお、『英領インド史』が「スコットランド歴史学派の分析方法」と「功利主義の人間=社会観」の結合を達成したものである点については、音無 [34] を参照。

- 6) ただし、功利という文明の尺度で計測して遅れた段階にあると診断された社会——たとえばインド——においては、なによりも経済活動を通じて、独立心や将来に対する配慮などの資質を身につけることが最優先されるべき課題と考えられていたのである。ウィンチが鋭く指摘しているように、ミルにとって「アダム・スミスが『国富論』第三編においてヨーロッパの封建制の没落の説明の際描いた静かな革命は、インドでは[ヨーロッパの立法者によって]前もって準備された出来事でなければならないが、商業と製造業は依然として革命の動因なのである」(Winch [33] p. 118)。

したがって、「生産の増加が依然として重要な目的であるのは、世界の後進諸国のみで」あって、先進諸国は進んで停止状態に入って、「現在よりもより多くの人々が……生の美点を自由に陶冶しその成長に不利な環境にある諸階級に生の美点の模範をあたえうる余暇をもつ」(Mill, S. [23] p. 755, 訳(4) 107-08頁) べきだとしたジョン・ステュアート・ミルの主張の想源は、余暇の享受によってこそ高度な知性と徳性が陶冶されると考えるジェイムズ・ミ

以上の点を踏まえれば、前節で指摘した中間階級の位相のズレは、富と名誉の結びつきに対する両者の評価の違いに基づいていると言えるであろう。それは、近代の文明社会の動因である「穏やかで冷静な」欲求にもとづく経済活動を肯定することを主要な課題としたヒュームやスミスと、現実の腐敗をなによりも現実の貴族的統治構造に求め中間階級にその浄化を期待したミルとの違いでもあるように思われる。

Ⅱ-3 貴族的統治構造による知的道徳的腐敗

それでは、現実の貴族的統治構造は何故このような悪しき観念の連想を強力的なものにしているのであろうか。すでに1811年の論文でミルは貴族の墮落を文明の発展の必然的な産物として歴史的に基礎づけていた。彼によれば、富者 (the rich) が「権力と支配の快楽」しかもちえなかった封建時代や反乱と内乱の時代、まさにそのような厳しい環境が彼等に自ずと「時代の尊敬と服従を引き出すあらゆる資質」を身につけさせた。しかし、「生の快楽が洗練され富者の時間を絶えず享楽の連続で満たすほど多様に増加する」と、彼等はそれまで身につけていた称賛の対象である高貴な資質を喪失するようになる。「高貴な資質の修得や表示において人民全体と争う」ことができないことを自覚した彼等は、人民の力を増大するあらゆる傾向に反対し、「人民による強奪の恐怖」から「財産の安全な所有とそれがもたらす耽溺の安全」に危険を加えることのない穏健な専制政を維持する傾向をもつようになる。こうして、「主権者の機嫌をとること、そして媚び諂いの技術によって寵愛と権力に辿り着くこと」は「墮落の観念を思い浮かべせるどころか、一般に名誉と威厳への適正な道と見做される」(Mill [5] p. 416) ようになるのである。

ルに求められるべきなのである。異なる観点からではあるが、ウィンチは、停止状態についてのジョンの考えがジェイムズから引き出されたことを指摘している (Winch [32] p. 195)。

こうして、富者は、知的道徳的な徳性を自ら獲得しえないために、それらの徳性への尊敬が社会に生じるのを妨げる。このような認識はミルの晩年における論文においても一貫しており、富者は、美よりも高価なものを追い求める情念を広め、高価を気品と同義語にすることによって、真の気品や洗練さが一般的に普及するのを妨げ趣味を腐敗させていると批判している (Mill [20] p.286)。要するにミルは、文明化の進展の中で自らの徳性を喪失するとともに、知性や徳性や洗練された趣味が社会に広がるのを妨げる障害となっている貴族を攻撃し続けたのである。

しかも、ミルによれば依然として権力を握っている貴族が社会の一般的風潮を規定しているのである。社会の他の人々にとって「彼等を模倣することが野心の根拠であり、彼等に似ることが名誉の源泉」となる。さらに「彼等の見解が、尊重される見解となり、彼等の生活様式が気品ある生活様式となり、彼等の行為の原則が洗練された道徳となる」(Mill [16] p.255)。それゆえ、貴族の腐敗した生を模倣することが、現実の中間階級の、ひいては全ての階級の生の目的となってしまっていると判断したのである。

それゆえ、ミルにとって、人々を狭い利己的な利益に執着させているのは、商業社会一般の傾向ではなくイギリスの貴族による支配であったのである。

「欲求の主要な諸対象が……少数の支配者の意志への媚び諂いと彼等の愛顧を勝ち得たことに対する報償と考えられているような……政治機構であるところでは、上長者を喜ばす手段が、この場合、最も重要な追求の対象となるのである。そして、上長者の愛顧は必然的に限られているので……他の人々を押し退けていく技術が重要となるのである。そして、陰謀、諂い、陰口、裏切り等の言葉で示される類の全ての能力は、多数の臣民の利益が単なる二次的な対象でしかない統治が生み出さざるをえないような政治教育の実り豊かな所産なのである。」(Mill [11] pp. 45-46, 訳111-12頁)

このように、ミルがなによりも統治構造の改革を問題とせざるをえなかったのは、利己的な富の追求と知的道徳的な腐敗がまさにこの政体から生じていると考えられたからなのである。

Ⅲ 議会改革の目的と展望

Ⅲ-1 議会改革の目的

ミルにとって過度の富の追求や知的道徳的徳性の軽視は、もはや統治能力を喪失しているにもかかわらず政治的権力を独占している貴族とその統治を支える法曹界と国教会の僧侶階級がつくり出している悪しき観念の連想に起因するものであった。貴族的統治構造の変革がミルの主要な実践的課題と位置づけられることになったのはこのためである。したがって、この変革の主要な目的は経済的というよりもむしろ知的道徳的な色彩が濃いものであったのである。

彼は、この改革を通じて、悪しき観念の連想の源泉である富と権力の融合が解体され、高い知性と徳性による統治というプラトンの理想が実現されることを期待したのである。ミルによれば、プラトンは「統治者と被治者の利益の一致が良き統治の唯一の保障を提供するという原理」を明白に理解した。しかし、プラトンは「神聖な代表の原理 (the divine principle of representation)」を知らなかったために、その利益の一致の保障を、「普通の人間とは極めて異なった種類の存在をつくる」「異常な方法」に頼らざるをえなかった (Mill [19] pp. 289-90)。ミルにとって代議制は、「苦痛を避け快楽を獲得しようとする欲求によって支配されている存在」である普通の人間を前提にしたが、良き立法の最良の保障を確保させる「現代の偉大な発見」(Mill [13] p. 16, 訳146頁)であったのである。

ミルは、『マッキントッシュ断片』の中で、自らの「統治論」において利己的な欲求に突き動かされる人間像を前提したことの正当性を主張している。彼によれば、それは「社会の中の人間の統治のための最良の手段につ

いて熟考する際に、人間の本性についての例外よりも、より一般的な法則に注意する……哲学者と立法者」(Mill [19] pp.278-79)の立場に適ったものであり、バークリ、ヒューム、ブラックストーンの方法を踏襲するものである。ミルは当該箇所、ヒュームの「議会の独立について」から長文の引用を行っている。ヒュームによれば、統治構造の牽制と統御を確立する際には「あらゆる人が悪人であると想定し、そのすべての行動において私的利益以外の目的は全く持っていないと想定されなければならない。この利益によって、我々はあらゆる人々を統治しなければならないし、それを通じて、彼を、その飽くことを知らない貪欲と野心にもかかわらず、公共の利益に協力させなければならない」(Hume [4] p. 118, 訳164頁)。ミルは、自分がまさにこのようなヒュームの方法に沿って、利己的な快楽を追求している現実の人々を、「他者の幸福に対するあらゆる追加が自分自身の幸福についての同様の追加を伴うと期待」しうる統治機構を媒介にして、「自分の利益と同様に恒常的に彼等の幸福を追求する」主体にしようとしているのだと自負していたのである (Mill [19] pp. 285-86)。こうして、快苦原理に従う「ありのまま姿」の人間が、統治者と被治者の利益が一致する統治を通じて、叡智と徳性を陶冶せざるをえなくするために、「人民の真の選択」(Mill [19] p. 291)が主張されたのである。

それゆえ、叡智と徳性とを統治に反映させうるかぎり、普通選挙権に固執する意図はミルにはなかったのである。場合によっては彼の改革は「秘密投票論」で展開されているように、公開投票を秘密投票にするだけの微温的な改革にすらなりうるものであった。すなわち「財産の不道徳な影響力を除いて財産の影響力をなんら奪わない」(Mill [18] p.19)改革も、それが財産によって他者の好意的な評判を獲得しうる経路を断ち切るものであれば、他の急進的な改革手段が伴わなくともその「不都合は……それほどひどく感じられない」(Mill [18] p. 17)と診断を下したのである。

「財産による名誉は、それが政治権力と結びついていないところでは、あるいは政治権力の観念に強力に結びついていないところでは、意味をもたない。」(Mill [18] p. 37)

この「財産の不道德な影響力」さえ除去すれば、統治構造は浄化され徳性と知性を陶冶する教育装置に転化しうると考えられたのである。

ミルによれば、秘密投票によって、立法の義務を遂行する適格な資質をもつ人々が得票するようになれば、名誉は財産の所有ではなく、「公的義務の遂行に適したものにする高度な精神的資質」の所有と結びつくであろう。資産家 (the men of property) は名誉を愛する。したがって、彼等が現在欠いているこれらの高貴な資質を獲得しようとする強い動機をもつようになる。そのような動機さえ与えられれば、資産をもつ彼等は「全生涯を、同胞市民の信頼を獲得する資格を彼等に与える知識、才能、そして徳性を獲得することに用いることができる」という長所すらもっている。こうしてミルは「我々の見解では、統治の仕事は当然富者の仕事なのである」と主張したのである (Mill [18] pp. 36-37)⁷⁾。

7) この「秘密投票論」の議論が、トマスの言うように1820年代中葉以降進んだミルの穏健化の表れ (Thomas [30] p. 131, p. 134) と捉えることが至当であるか、あるいは改革の運動を前進させるためのレトリックであったのか、ここで問おうとは思わない。我々が指摘したいのは、このような議会改革がなされれば、土地分割を阻む相続法など地主貴族の階級利益を維持するための「不自然な不平等」が撤廃され、長期的には貴族の経済的基盤自体が解体されていくという展望をミルがもっていたということである (Mill [20] p. 285)。したがって、これによって中庸な財産所有者が社会の指導的な階級となるというミルの展望が変化したことにはならない。なお、ミルを徹底した「自由民主主義者 (liberal democrat)」として描いているフェンは、「秘密投票論」における「富者」を「蓄積の自然法則」を通じて自らの富を獲得した人々と捉えた上で、それを一つの論拠として、トマスの主張するようなミルの保守化はなかったと主張している (Fenn [1] p. 136)。ミルの穏健化の当否にかかわらず、ここでの「富者」は明らかに「不自然な不平等」にその経済的基盤をおいている貴族を意味しており、したがってフェンのこの論拠は妥当ではない。

「急進的改革者は一般に概して非難される。……しかし、我々に関するかぎり、我々はアリストクラツツである。我々は、統治は、最も優れた人 (the *Αριστοι*) の手におかれることが最高と考える。それは、その用語によって最善の人 (the *Βελτιστοι*) の意だと解するギリシア人の意味においてばかりではなく、それによって単に富者の意だと解する現代人の意味においてである。我々は、統治が、富者を最も優れた最善の人 (the *Αριστοι and Βελτιστοι*) にするような条件で富者の手におかれることを望むだけである。最も優れた最善の人が誰であろうと、我々は彼等によって統治されることを望むのである。選挙権を適切な基礎の上におくならば、彼等は富者であることは疑いないのである。」(Mill [18] pp. 37-38)⁸⁾

こうして、「権力と影響力をもった人々」が自らの知性と徳性を陶冶する動機をもつならば、「叡智と徳性があまねく行き渡り、異なる諸階級が相互の善行の絆 (the ties of mutual benefaction) で結びつけられる社会」への大きな一歩となると期待したのである。このような「社会の秩序と調和が完全となる」道程には、人間本性の原理に反するものはなにもないことが強調される。

「これらすべての中に、一つもユートピア的な考えはない。それは、我々が現在経験している極めて悲惨な対照的な現実の諸結果と同様に、人間本

8) ここにその源泉をプラトンまで遡るジェイムズ・ミルのエリート主義を認めることができよう。それゆえ、一般に言われるようにジョン・ミルのエリート主義の源泉はサン・シモニアンやコウルリッジよりもジェイムズ・ミルに求められるべきなのである。この点に関しては、Fenn [1] (pp. 78-79) も参照。トマスは、「最も賢明で最も有徳な成員達によって支配される社会という中核的な理想に関しては、父も息子も意見が一致していたのである」(Thomas [31] p. 29, 訳35頁)と指摘している。なお、プラトンの影響の大きさはジョンの次の証言を参照。「私の父親は、自分自身の精神的修養 (his own mental culture) は、他の誰よりもプラトンに負うところが大きいと考えていたし、若い学生達にも誰よりもプラトンを読むことを勧めていた」(Mill, S. [24] p. 25, 訳28頁)。

性の原理から必然的に生じない帰結は一つもここで先取りされていないのである。必要なことは、ただ、社会の他の人々との関係における指導的な諸階級の地位を、自分達自身と他の人々の両者の叡智と徳性に利益関心をもちうるように変更することである。代議員選挙権をしかるべき基礎の上におくことによって、このことは達成されうるのであり、その称賛すべきすべての諸帰結が保証されうるということは、真実よりも驚くべきことではないのである。」(Mill [18] p. 39)

さて、以上のように、ミルにとって議会改革の主要な目的は、まず富と権力の癒着を断ち切ること、すなわち「財産の不道徳な影響力」を除去することにあった。そして、それによって「財産による名誉」を去勢し、名誉と「叡智と徳性」との間に強力な連想を形成することにあったのである。もはや富によっては他者の好意的な評価を得ることができず、叡智と徳性によってのみそれが得られる環境さえ与えれば、快苦原理に従う人間は自ずと叡智と徳性とを陶冶するのである。この陶冶は立法者だけにとどまらず、名誉欲と野心によって作用する模倣の原理を通じて社会全体に伝播していくことになる。ここにミルにとっての議会改革の主要な目的があったのである。

「欲求の主要な諸対象が、偉大で有徳な行為に対する自然の報償——人類への高貴な奉仕と、さらに人類への奉仕に対する偉大な努力が自ずと生み出される寛大で愛すべき感情とに対する自然の報償——と考えられているような政治機構であるところでは、賞賛すべき行動に向かわせる全ての賞賛すべき資質、すなわち、偉大な知性、完全な自制、圧倒的な仁愛を獲得しようという豊かな熱情が人類の間に普及するのが見られるのが自然である。」(Mill [11] pp. 45-46, 訳111-12頁)

それゆえ、ミルの場合、経済的利益の実現を主要な目的として議会改革が指向されたのではないのである。飽くなき貨幣追求をその動因とする生産力の無限の発展を肯定し、それに対する障害を取り除こうという意図は、ミルのものではなかった。むしろ富と名誉の強力な連想を解きほぐし、飽くなき貨幣追求を緩和することこそ議会改革の目的であったのである。

Ⅲ-2 議会改革の展望

さて、統治能力を失った貴族ではあれ、彼等が社会の支配的風潮を形成し、さらに彼等を模倣することが社会の他の成員の野心の対象となっているならば、腐敗した貴族的統治構造を温存させているこのような構造をどのように断ち切ることが可能なのであろうか。この点に関してミルは極めて楽観的な展望を抱いていたように思われる。

第一に、彼は家庭教育や技術教育によって、現実の腐敗に抗しうる連想を形成することができるとして、ここに改革の指導者養成の基盤を求めた。

「一定の〔観念の〕つながりが、幼年期を巧みに用いることによって、以降の人生が誘発するいかなる習慣によっても左右されないほど強く習慣づけられうるし、そしてこれらのつながりが、知的道徳的行為が依拠する決定的なつながりとなりうると思える。この場合には、墮落した無知な社会の影響力は、大いに弱められるであろう。」(Mill [11] pp. 44-45, 訳109-10頁)

ジョン・ミルに対する教育はまさにこのような「墮落した無知な社会の影響力」から遮断しようとしたものであったことは言うまでもなからう。しかもジェイムズ・ミルにとって将来の改革の指導者の形成には人間本性の原理に反するものは一つも必要ではなかった。それは快苦原理に従う人間に対して自らの快楽と良き統治の観念との間に強力な連想を形成させる

ことによって可能と考えられたのである。

「人々は多様な嗜好 (tastes) をもっている。そして、実際に、良き統治のための保障の確立の嗜好をもっていて、自らが従事しうるいかなる他の目的よりも——富や権力も例外ではなく——この目的の成功からより多くの快楽を引き出すであろう人が存在するということは不可能ではないのである。」(Mill [15] p. 222)

さらに、他者から称賛されたいという「他の利己的な動機」が改革者達の行動を支える。しかも文明の進歩に対する確信、すなわち「知的および道徳的な資質がこの国の人民の間で大いに進歩を遂げており、しかも良き統治や人々の幸福と知性を目指した努力を実際に支持する階級が我々の努力に報いるほど十分な数に達している」(Mill [15] p. 222) という確信によってこの気高い野心はいっそう強力になるはずであった。

しかも、ミルの確信によれば、イギリスにおける改革の機はずでに熟していた。1817年10月19日付リカード宛書簡の中でこの確信は次のように表明されていた。

「この国の住民は、彼等の統治における何らかの重要な改善に関して、[華氏] 32° の気温にさらされた水差しに比することができるように思われま
す。それを完全に制止したままにしておけば、水は凝結しないままでいる
でしょう。しかしそれをすこし振り動かせば、たちまち凍結して氷になり
ます。社会のすべての大変革は、時がくれば容易に実行されます。宗教改
革を生み出した人は、財産もなく、名もなく、そして実際に才能もない一
個人だったのではないのでしょうか？」(Mill [7] p. 198, 訳234頁)

「すこし振り動か」すためには明証が必要なだけであった。というのは、

「明証という最大の力が存在するところではどこでも、その力は最大の印象を生み出すであろうという道徳的現実性が存在する」(Mill [7] p.22) からである。こうして、ミルによれば良き統治という行動目標は、すでに「事物がそれ自身で動いている潮流と一緒にいる」のであり、それゆえ「人間精神の現状においてすべての気高い野心ばかりではなく、利己的な野心でさえ採ろうとしている行動目標」となっていたのである (Mill [9] p. 301, 訳353頁)。

しかし、このような展望は現実的であったであろうか。知的および道徳的な資質を向上させた人民が良き統治の実現をすでに十分な力で求めているという彼の楽観的な確信と、現実のイギリス社会において「支払わなければならない代償に値する快樂はほとんど存在していない」にもかかわらず「快樂の過大評価」がなされているという悲観的な認識とは、ミルの中でどう整合していたのであろうか。議会改革を実現させたエネルギーの高まりがミルの想定したように知的道徳的な資質の進歩によるものではなかったとすれば、ミルの期待した目的は改革後も達成されるべくもなかったのである。知的道徳的陶冶というジェイムズ・ミルの理想を妨げたのは、改革後も温存された富を権力の唯一の源泉とする統治構造だけなのであろうか。ジョン・ステュアート・ミルは父のこの理想を継承し、それを妨げるものを商業社会それ自体に求めることになるのである (立川 [36])。

IV むすびにかえて

これまで我々は、ジェイムズ・ミルの中間階級と議会改革という観点からその思想の特徴を明らかにしてきた。彼にとって重大な問題は、統治能力を喪失した貴族の支配が生み出している知的道徳的腐敗状況であった。文明の進展は、多数の中庸な財産所有者を創出した。彼等は余暇を享受し知的にも道徳的にも優れた資質を陶冶することができる人々である。しかし、富を権力の唯一の源泉とする統治構造は、富と名誉との連想を実際に

ほぐすことが困難なほど強力にしている。これが富に対する欲求を無限な、そして利己的なものにしてしまっているのであり、知性と徳性とを蔑ろにする一般的風潮を蔓延させているとミルは診断した。ミルにとって、議会改革は、まさにこのような財産と名誉との強力な連想の原因を除去し、叡智と徳性を名誉と結びつけることを可能にするものであった。それゆえ、議会改革は、なによりも道徳的な課題であったということができるのである。

もちろん、議会改革によって、「分配の自然法則に加えられた不自然な抑制の結果である不平等」という貴族の経済的基盤自体を掘り崩し、「蓄積の自然法則」を十全に貫徹させることも期待されていた。しかし、ミルは、財産に基づく名誉が政治権力との結びつきを断たれ意味をもたない状態では、「強力な貯蓄動機」はなくなり、「適度な財産以上のものは、蓄積の動機からはほとんど生じえない」ことになる」と展望していたのである（Mill [14] pp. 55-56, 訳47-48頁）。換言すれば、そこでにおいて富の獲得は穏やかな欲求となり知的道徳的な徳性が陶冶される経済社会が成立すると考えられていたのである。「蓄積の自然法則」の実現もミルにとっては道徳的な課題であったのである。しかし、この点は改めて別稿で検討されるべき問題である。

[注記]

- 1) James Mill と J. S. Mill の出典表記は、それぞれ Mill [], Mill, S. [] によって区別した。
- 2) 訳文は必ずしも邦訳書通りではない。なお傍点はすべて引用者による。

[参 考 文 献]

- [1] Fenn, R. A., *James Mill's Political Thought*, New York & London, 1987.
- [2] Fontana, B. *Rethinking the Politics of Commercial Society: The Edinburgh Review 1802-1832*, Cambridge, 1985.
- [3] Hirschman, A. O., *The Passions and the Interests: Political Arguments*

- for Capitalism before Its Triumph*, Princeton, 1977. 佐々木毅・旦祐介訳『情念の政治経済学』法政大学出版局, 1985年.
- [4] Hume, D., “Of the Independency of Parliament,” in *The Philosophical Works*, ed. by T. H. Green and T. H. Grose, Vol. 3, London, 1882, rpt. 1964. 小松茂夫訳『市民の国について』(下) 岩波文庫, 1982年.
- [5] Mill, J., “Chas, *Sur la Souveraineté*,” *Edinburgh Review*, XVII, 34 (Feb., 1811), pp. 409-428.
- [6] Mill, J., Letter to Ricardo, 23 Augt. 1815 : in [26] vol. VI.
- [7] Mill, J., Letter to Ricardo, 19 Oct. 1817 : in [26] vol. VII.
- [8] Mill, J., “Colonies,” (Feb. 1818) : in [21].
- [9] Mill, J., Letter to Ricardo, 23 Sept. 1818 : in [26] vol. VII.
- [10] Mill, J., “Economists,” (Jan. 1819), in *Supplement to the IV, V, and VI Edition of the Encyclopaedia Britannica*, vol. III-2, 1824, pp. 708-724.
- [11] Mill, J., “Education,” (Dec. 1819) : in [21] 小川晃一訳『教育論・政府論』岩波文庫, 1983年.
- [12] Mill, J., “Liberty of the Press,” (Jul. 1820) : in [21].
- [13] Mill, J., “Government,” (Sept. 1820) : in [21] 小川晃一訳『教育論・政府論』岩波文庫, 1983年.
- [14] Mill, J., *Elements of Political Economy*, 1821, 3rd. ed. 1826 : in [22] 渡邊輝雄訳『経済学綱要』春秋社, 1948年.
- [15] Mill, J., “Periodical Literature—Edinburgh Review,” *Westminster Review*, I, 1 (Jan. 1824), pp. 206-249.
- [16] Mill, J., “State of the Nation,” *Westminster Review*, VI, 12 (October, 1826), pp. 249-78.
- [17] Mill, J., *Analysis of The Phenomena of the Human Mind*, 2vols. 1828 ; 2 vols. 1869 ; rept. New York, 1967.
- [18] Mill, J., “The Ballot,” *Westminster Review*, XIII, 25 (July, 1830), pp. 1-39.
- [19] Mill, J., *A Fragment on Mackintosh*, London, 1835 : in [22].
- [20] Mill, J., “Aristocracy,” *London Review*, II, 4 (Jan., 1836), pp. 283-306.
- [21] Mill, J., *Essays reprinted from the Supplement to the Encyclopaedia Britannica*, 1828 : in [22].
- [22] Mill, J., *The Collected Works of James Mill*, 7 Vols, London, 1992.
- [23] Mill, J. S., *Principles of Political Economy with Some of their Applications to Social Philosophy*, 1st ed. 1848 ; 7th ed. 1871 : in [25]

- vol. I. 末永茂喜訳『経済学原理』（全5冊）岩波文庫，1959-63年。
- [24] Mill, J. S., *Autobiography*, 1873: in [25] vol. I. 朱牟田夏雄訳『ミル自伝』岩波文庫，1960年。
- [25] Mill, J. S., *Collected Works of John Stuart Mill*, ed. by F. E. L. Priestley, J. M. Robson and others, 33 vols. Toronto, 1963-1991.
- [26] Ricardo, D., *Works and Correspondence of David Ricardo*, ed. by P. Sraffa, 10 vols. Cambridge, 1962-66. 堀経夫他訳『リカード全集』雄松堂書店，1969-78年。
- [27] Smith, A., *The Theory of Moral Sentiments*, 1st ed. 1759; 6th ed. 1790: in [29] 水田洋訳『道徳感情論』筑摩書房，1973年。
- [28] Smith, A., *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1st ed. 1776; 5th ed. 1789: in [29] 大河内一男監訳『国富論』Ⅰ～Ⅲ中公文庫，1978年。
- [29] Smith, A., *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith*, ed. by R. H. Campbell and A. S. Skinner, Oxford, 1976.
- [30] Thomas, W., *The Philosophic Radicals: Nine Studies in Theory and Practice 1817-1841*, Oxford, 1979.
- [31] Thomas, W., *Mill*, Oxford, 1985. 安川隆司・杉山忠平訳『J. S. ミル』雄松堂出版，1987年。
- [32] Winch, D. N., "James Mill and David Ricardo," in D. N. Winch ed. *James Mill; Selected Economic Writings, Edinburgh*, 1966.
- [33] Winch, D. N., "The cause of good government: Philosophic Whigs versus Philosophic Radicals," in S. Collini, D. Winch & J. Burrow *That Noble Science of Politics: A study in nineteenth-century intellectual history*, Cambridge, 1983.
- [34] 音無通宏「功利主義と英領インド——J. ミル——」宮崎犀一・山中隆次編『市民的世界の思想圏——古典派経済学の再検討——』新評論，1982年。
- [35] 千賀重義「哲学的急進主義とリカードウ」平田清明編著『社会思想史』青林書院新社，1979年。
- [36] 立川 潔「『過渡期』のJ.S. ミル——商業社会における道徳的腐敗と実践的折衷主義——」『北海学園大学経済論集』第38巻第3号，1991年。
- [37] 永井義雄「功利主義」田村秀夫・田中浩編『社会思想辞典』中央大学出版部，1982年。
- [38] 山下重一「ジェイムズ・ミルの『統治論』と『出版の自由』」『國學院法学』第28巻第1号，1990年。

[39] 山下重一「ジェイムズ・ミルのベンサム論」(上)(下)『國學院法学』第30卷第2号, 第31卷第1号, 1992-93年.

[付記] 本稿は平成7年度成城大学教員特別研究助成による研究成果の一部である。